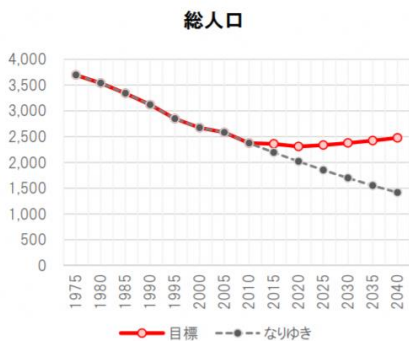


①海士町地区の現状 - 人口・拠点施設

	2010年 国勢調査	2040年 なりゆき	2040年 目標
総人口	2,374人	1,416人	2,475人
生まれる 子どもの数	11人	8人	25人
生産年齢 人口	1,201人	624人	1,309人
高齢化率	39%	46%	33%



- 担い手組織

- ・任意団体明日の海士をつくる会

20代~40代の今後5年間海士町に住み続ける意志のある人を一般公募し、計画の素地となるあすあまチャレンジプランを策定

計画の実践のため、任意団体として活動継続中
民間12名 行政8名 Uターン10名 Iターン10名

人口：2353人（2017海士町調整要覧）
高齢化率：39.0%（％）
拠点施設：中央公民館、村上家資料館、隠岐国学習センター 等

②海士町地区の課題

- ❑ 理想の海士町を作るための計画を、計画に終わらせず実践を行うこと
- ❑ 一部の住民ではなく、より多くの住民が主体的にまちづくりに参加する機運醸成を行うこと
- ❑ 島外応援団との交流を深め、力を活用し、人材育成や新たな共創モデルの構築に取り組むこと。

③支援状況

機運醸成・人材育成

- (1) チャレンジフォーラムの実施
- (2) 島民のまちづくりへの参加意識を高める学びと対話の場の創出

実践活動

- (1) 明日の海士をつくる会継続によるまちづくりのコアモデルづくり
- (2) チャレンジセンター設立を目指した大人の夢ゼミ活動
- (3) 島外応援団との共創プロジェクトの創出



④成果見込み

- (1) 体制づくり：
 - ・明日の海士をつくる会が継続され、海士チャレンジプランの実行・進捗確認が進んだ。
 - ・チャレンジセンター設立準備会が発足した。
- (2) 機運醸成・人材育成・実践活動：
 - ・チャレンジフォーラムを2回実施。住民同士の海士町の挑戦のイメージのすり合わせ、チャレンジ理解が進んだ。
 - ・大人の夢ゼミから下記のようなプロジェクトが実現化した。→地産地商カフェ、WEBリニューアル計画、生き生きと死ぬるフォーラムの実施等
 - ・海士町で起こっている町民のチャレンジや、海士町の島外応援団のチャレンジをまとめた新聞の発刊を開始した。
 - ・外部アドバイザーの知見を活かした戦略会議が実施できた。
 - ・学びと対話の場を全15回実施した。
のべ参加人数403人+オンライン参加人数45人となり、多様な住民のまちづくりへの意識向上ができた。

⑤残る課題

- ・明日の海士をつくる会の継続=メンバーの多忙さが増す中、任意団体としての継続をどう図っていくか？
⇒物理的に集まれる場所を作ることの検討
- ・チャレンジセンターの設立
⇒単発的な大人の夢ゼミではなく、継続的にチャレンジが応援できる仕組みや、町民の誰もが利用できる仕組みづくりが必要
⇒小さな拠点づくりの基本である生活機能確保、生活交通確保を重点的にフォローできる仕組みづくり
地域産業資源の振興に関するプロジェクトの継続した伴走継続
- ・チャレンジフォーラムの継続
⇒1回あたりの参加人数は町内の会場キャパの都合で、30人~50人程度。来年度も継続的な開催が必要
⇒または、産業文化祭など町の大型イベントと連動しての開催を検討
- ・第五次総合振興計画づくりにむけてさらなる住民の機運醸成とスキルアップ
⇒学びと対話の場の連続講座可
⇒持続可能な講座運営のための有料化、オンライン配信のビジネス化の検討
- ・地域外応援団との具体的なプロジェクトの展開
⇒関係性づくりや戦略策定のみならず、資金調達・ビジネスの共同構築が実施できるように

総括

小さな拠点づくりにも段階があるといえる。海士町においては、住民参加の裾野の拡大がひとつの大きなテーマであり、そのことが、組織の枠を超えた、さらに大きなコレクティブなインパクトを生み出すこととなる。そのための、既存の計画の実効性を高め、住民の手でつくる町づくりを今後も継続していくこと、住民一人ひとりのプロジェクトの生み出しや推進力を挙げていくこと、学びの場を通じ、広い住民参加の入り口づくりや交流づくりをすることについては一定の成果が出たと評価できる。しかし、この流れも支援の手を止めれば、すぐに止まるリスクを抱えている。一方で、地域内応援団と共にビジネスレベルまでのインパクトを出していくことや、小さな拠点づくりのうち、「地域資源の振興」についてはプロジェクトが進みつつあるが、「生活機能の確保」、「生活交通の確保」については住民主導のプロジェクトが今後生み出されていくことを後押しする必要がある。